

吉原楊枝

合

吉原楊枝

1963
24



二

吉原揚枝叙

玉澤ハ横腹よこむらル眼めが有あれどもども玉たま

屋や瀬せの二階に半はんかられられれ解とふふハハの目め有あり

船ふね下した房ぼうノ約やくささ。氣き傳つたへへの葉は類るいが

四よの眼めもああららずず。寺てらのああららのの船ふね通とを

以もて五ご法ぽうをを足あららせせ。殿との方かた路ぢののゆゆららしし



2

へ13
1963
24

くまのこころをいふ事。海の中月の出
ちまふごとく。無^{かり}あが挑^たげらるゝあつと深^{ふか}
穂^ほ角^{かく}の棒^{ぼう}がわらぬとと。豈^{いか}己^{おの}所^{ところ}に
聞^きし世^よに於^お皇^み此^こ道^{みち}の明^あるい^つの事^{こと}

天明八戊申書

毎葉鈴成 

自序

以^も心^{こころ}もさ^さの喜^{よろこ}び心^{こころ}地^ちぞと。よ^よは
神^{かみ}一^{ひと}多^たれ^れよ^よの^の事^{こと}。あ^あく^くふ
は^はく^くし^しり^りい^いま^まほ^ほと^と来^きす。い^いま
別^{わか}れ^れよ^よ夢^{ゆめ}く^くと^とも^も明^あら^らい^いす。
情^{なさけ}もあ^あく^くよ。世^よは口^{くち}伊^い人^{ひと}家^{いえ}ハ筆^{ふで}甲^か

ちよんちよん二六二分で買つてとものとおりの
江戸の豆腐の喰つぬ車とあつぬ中川の
ちよんちよん一。家よ表陸と橋をわたりて
橋と果敷のいあひよ生まれ出くるもの
あつ。所代ハ柏子あつ飯時とあつ世華の
海りの事をとあつくうとつと天性氣
どうらうなつ生まれ付あつたわりの所代と
ちよんちよん今年廿五の晩にけつ柳橋の別荘に居

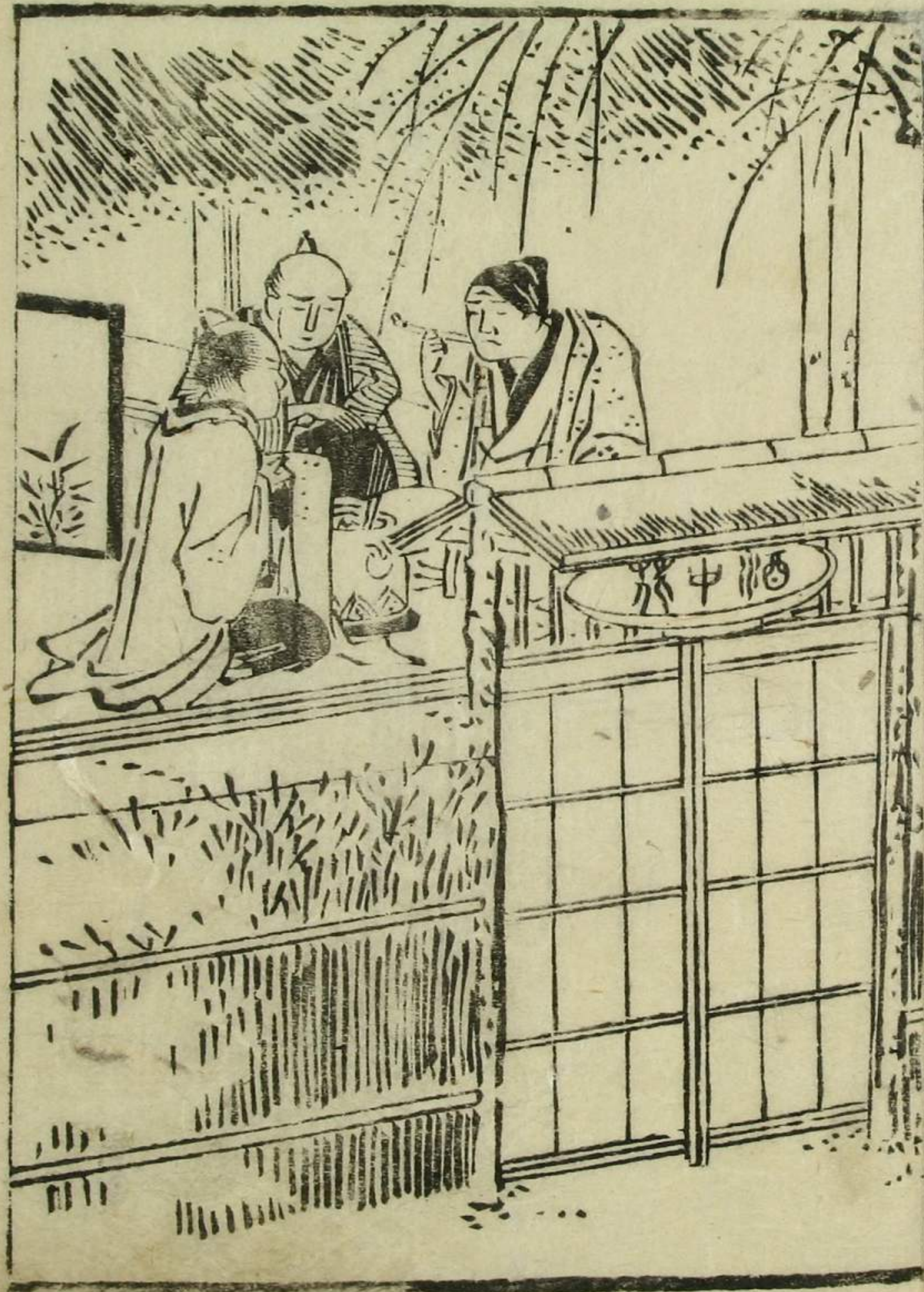
あつきほつてこの内のもつちよんちよん
ちよんちよんあつこのちよんちよんちよん
流しともの雷馬の音とあつてハすうとこの
でしよとちよんちよん唯ちよんちよんちよん
のちよんちよんちよんちよんちよんちよん
のちよんちよんちよんちよんちよんちよん
ちよんちよん。春ちよんちよんちよんちよん
かちよんちよん。浅草ちよんちよんちよんちよん

まゝの常しううまぬ^{あざ}雑のいぢりの有
りふむを甘くふれぬ。垣の内よ一ト平の柳
まうえ^{いかり}枝折門よる世の家^ぐとけ酒中^{さか}を
いふこ字よと書こころ。かの立柳先生と書こひ。
東籬^{とうり}菊^{きく}把^へ悠^{ゆう}然^{ぜん}聖^{せい}南^{なん}山^{さん}といふまうちう
但一^{ただ}生^{せい}花^か盆^{ぼん}のかんざん^{ざん}なる。何^{なに}もせよ
かろく物^{もの}すきこ。い春^{はる}まよ一^{ひと}を中^{ちゆう}す
あんと垣^{かき}の小^こうげ^{うげ}よ身^みとよせく心^{こころ}を

うがひりうふサハ丸^{まる}の女^{にょ}りう白^{はく}移^いりのさめ
でなちまれよ。はちま一^{ひと}のあう^{あう}果^{くわ}ふら
まもそのまありのちとやれらる小^こ袖^{そで}よころえ
すの帯^{おび}とこれのわうあくむすび。まんのちよふ
ゆく手^て廻^{まわ}のさまの虫^{むし}とあうくいまやうす
色の青^{あお}きあう髪^{かみ}のものうすしいまう
がらんふんせくもそれよのおぐらとま
ま。さうづの縷^{いと}物^{もの}て宵^ようとま場^ばと様^{さま}ふ

ひねりつて物ずきとちりぬ。向かうりくま
わつら連。まへに竹よすまのぼしめちや
有りまもぶくのま神より落ちるのこま
をぬり。らんがづりのまあつまんよ。こまじのま
袋。今一人のまらつたのこ神よりまへんどのひね
り。うらまのまのまあつら結つて髪か
まよまをまはまんぞまきをゆ神よりゆはあ
まのゆ。まむくまをませうけ。かまのまおね

こげくま。又まへにうらま結城まのこ神
よままどねま。まへにちりぬのま何ち
ぬらかづりづまんのうらまうらまのりち
つまのまぬひまかづりうらままかま。
まとこまうらまづまをまへにまはま。
横文字ままぬ。まをうひままま。ま
まをまへにまへまま。まへにままま。
まへにままままままま。



ふよんでうんく。母さやうきは是ても新し手の
氣さうふ。まかしの目きく志やうかよめ
志んやうきも有りがたき志やんらんが
志やうん状とよむ母のよしくなぐりく
てもうきよひ文句はかきしと二つは川裂さい
て手あがりのちしを拭くしあたまの
さうらう。下るの門より志さうかき二つ三つ
志く志生と母りし。志出りうきとうき

年ハ三十度とて足て手の有るさかり澄
あてたげしと成有りしと考けかぬ
風格。かきし嵐の絲もさ少袖よやまき葉
ざんすの扱ひと志あなう物く。こゝろ志味
子。文家志子。侍志赤子。括つきの志生今の
志うしひが身よ入つてかきしと同きさめ
中めりよハ志いせい買の極紋傳と中
かきしうりしと母やうかきしれと志ふけ

三人ハすゝめ東小石うつらるるごとく却をまり
吉れハ磁石ハ母のゴあつちよハけ先生似事
と云出を年と波身まゝを指さうりふあ先
生きぬぬあゝ白。史釈也の方後^{つうし}莊子の
寓言^{らんげん}。楠々^{こころ正}。豫略^ま。陸^まの陸とくと組屋の
あき川で。唱ハ遠くと商人のとくと遠いも
傾城のとくととつあもこも身と路のうそ
あそそちと所とようを信くよあつて貞母よ

あつてけいせいを備する大^{ちか}標標吉丁史と
とつて我よ似うといあよひうかると
はまどらせいとくハ文字あまうも生れ
もサバのり六とまの地^ちの娘あゝ母やとくか
のこあよけ里よまれば。女^ま所^ま建^ま別^ま工^ま。寧^ま。標^ま
かまそらんもかす。うそとく物さうそもあつ。
まそとく物さうそもあつ。又うそとく物さ
まそとくああ也。近松ハなつが作考よ傾城よ

またねーと云ふ所あるぬかや枯らさうと云ふ
と此のぬかや云ふ所の此はさうくぬかよ云ふ
るハ深きをまらふらふのらをぬかや
うらまねかぬばまらあてまると有と云ふ
も又あわかしむらしけ及のせんらまら
けいせいの^{まら}と痛まぬらもらかき
まらすハ高貴まらぬららハさうまら
さ何ハ高貴人のまららハはらと云ふ
せらもあかまら。その商人をまら
くまらけるまら。おまらと云ふ
小刺で正しんの小つぬ切りまら
かまら。傾城のまらと云ふまら。あ
それらけのまらと云ふまら。その情まら
事あらうら。又郵送をまら。生愛持
笑まら。弟屋の二階まら。げい
—又まらの方より金銀をまら

と我色男なりけ里の通とをいふもあれ
どそれとよき事とあひまひんとあめつら
是よ夫いふよけの有る事なり。なよの概久
らやこの素法師江戸の素良哉紀文と
ちよめ大いその身をさうら。下総の徳よむ
すこの人むやあつ。傾城買のちんぐ
の志すしよく押りしよけのある
の心しよく。さうく情とめらむと

すふ廊なれば客も女所も情あつくと
有くまよめ。君へ今約取あつ。時
とつ。一句の情いふとふありか。まよ
女所の客よあつとつ。ふよけ有りま。初
今よめ男づつと。扱よよあつ。なり。愛
つ。あつ。バ。かく別たつ。めか。ま。ま。
ま。物よあつ。ね。男。振。つ。の。ま。ま。方。利
ま。つ。し。ま。ま。の。扱。つ。ま。ま。ま。ま。ま。ま。

長くいひつゞきぞんとあつまぬやうなる。
ちどめへふぬ 亂れとなれども。まう二月
くら。二月くら 年をてど。まうのいひ
ようしく。そのやうもあつぬやうなる。
又まればうてもなき男が出来ればまう
珍れくついま。まうよなきありのく。け
身のうもあく。なしく。世の世もぬ人あ
け人もなきあれのや人のまもいぞらば

いふやうの事もさうしくなり。女房も
さうよなり。酒とやわろの遊んである
なごう。おらんをすさやうよなきありの
おまう。おらんをすさやうよなきありの
おんのかんれい。おらんをすさやうよなき
そのあつぬ。まう。まう。まう。まう。
おひげなき人のあつぬ。まう。まう。
おをすさやうの文句よ。おらんをすさやう

あうやれとこころもいまるくはのふゆの世
が身うつくぬくまうこのまゝいふ人のりこそ
切まきまじり客をせくやどのまゝとて又いふ
うらせくもの友。さうくせくもかまひ有り
ととくまんよやれておまへ。やまろと形んで
もゆへ公へうろぬりの世。地まうよらんく
といふゆ有り。いづうせうまう男の母のそふ
あふは女解の二ういひまへよせくまありす

毎夜かたれどとてたぐいのらんまうまハツよ
格ふをあひひよ出ることふゆのふうろあ
はうろあまわけらうる有り。りちめんを
事と一やうよした。まんのま事と。まね乃
ま事と歌のま事と二ツ有也。又なまこの
あひのけなまときあうて二ういひまあま
よ女解中の町くあふ事有り。是はあふ
どうろてもかき。あまうせうまなりしあう

おきて申す。あまのうかづらをせぬまのなり
あまのうかづらをせぬまのなり。あまのうかづら
をせぬまのなり。あまのうかづらをせぬまのなり。
あまのうかづらをせぬまのなり。あまのうかづら
をせぬまのなり。あまのうかづらをせぬまのなり。
あまのうかづらをせぬまのなり。あまのうかづら
をせぬまのなり。あまのうかづらをせぬまのなり。
あまのうかづらをせぬまのなり。あまのうかづら
をせぬまのなり。あまのうかづらをせぬまのなり。
あまのうかづらをせぬまのなり。あまのうかづら
をせぬまのなり。あまのうかづらをせぬまのなり。

又、あまのうかづらの内、あまのうかづら
をせぬまのなり。あまのうかづらをせぬまのなり。
あまのうかづらをせぬまのなり。あまのうかづら
をせぬまのなり。あまのうかづらをせぬまのなり。
あまのうかづらをせぬまのなり。あまのうかづら
をせぬまのなり。あまのうかづらをせぬまのなり。
あまのうかづらをせぬまのなり。あまのうかづら
をせぬまのなり。あまのうかづらをせぬまのなり。
あまのうかづらをせぬまのなり。あまのうかづら
をせぬまのなり。あまのうかづらをせぬまのなり。
あまのうかづらをせぬまのなり。あまのうかづら
をせぬまのなり。あまのうかづらをせぬまのなり。

まへーがけぬきあふおんちの物とさあべ
けりもあふ有り。日多。時多。血多。血さけ
血さき中。牛五三。入やんあひりとの
かき切り。ゆび切り。はめとるま又さ中くの
公中よぬて人控又といふ事有。是は先の
お辭の物とぬすこ。いふあやまう控又
なれ。いふ事有。こはけゆ又てとちと
か。せ候といふ事也。いふもまといひた

事しけ妙よあふれ。公中あまやもさる事
生のする事し。さきて公中といふのいひねぬ
あやかり後りさる事よ。はくねれことん事
この道の身し。どのこんねれさ。おはあさ
あふあふ。この世。公中あふ。いふ事
らま。小口は。可也。をあてふ。か。ら。ま。ら。の
か。これ。ば。さ。の。公。中。とい。ふ。公。よ。有。事
か。ゆ。ひ。と。切。一。切。の。道。の。の。ま。ら。の。は。世。よ

有りてうふ不しを知らず。どうも衆も女帝も
かばわれやを。志んより進して見せらるらるら
孝のしるき身有り。志んふわれくか
いろくのろろと。かんだんの母のろろとけりて
志手あむ。あつちやうだいのつと合もかまの
きりしむなまてんおさるのめせ。むろくか
中あよろくの。おんトあまもやのつろろ
をせらるらるら。志んあまと女帝とのろろかよれ

かきま事れ。はくしがとけり。凡よ容と
女帝とさし向ひあく。金銀をそろあつろ
いろく安事也。坐しおの女帝の男の
おのろまふ。一安事ハ中ろの女帝一有し
相志ろろろ。二すは目あつろろろろ
門あろろ。たろの女帝とろろろろろ
志んとけり。中して早ろろろろろろろ
けり。事やあくもあつろろろろろろろ

かの先生。さもあはれといふ顔付ありしゆふ
まゝははらせ我々のうらまをかく雪うせむ也
家もやじとらつものハ。物柳くえん其人の
まのうらまのあし。口の中を清くうら
なすの御身し。その雲終く有るといふ
その中よ。古来初枝と号し。ゆきの花
一様有り。さうよけいせいの中じらおふは
おとせ。世所のあふとさう。おとせ
おとせ。

書をみぐれては通あるのうらまをうらま
その人情をさぐり。わが我らと。まをうらま
古来初枝の精なり。今こそそのひめを
こんせも。と。まをうらま。白くんまふ向ふ
菊の地紋。おのふ。おのふ。おのふ。おのふ。
細のうらまをうらま。おのふ。おのふ。おのふ。
おのふ。おのふ。おのふ。おのふ。おのふ。
おのふ。おのふ。おのふ。おのふ。おのふ。
おのふ。おのふ。おのふ。おのふ。おのふ。

来春出版乃小冊外題左尔记
入御覽也

青樓 居續日記 全 近刻

青樓 遊君 河子む石 全 近刻

自 跋

漢カシ 苑エニ 有リ 榭シキ 一ナ 日チ

三タヒ 起キキ 三シ 眠ミル 号カウ 曰フ

人ニ 榭ト 焉ヨ 蓋カシ 齒ヤウ 木シ

以テ 榭ラ 所トコロ 製セイスル 也ナリ 故コト

怪 <small>クワイオヒ</small>	道 <small>タウヲ</small>	雲 <small>ウン</small>	精 <small>セイ</small>	雖 <small>イハトモ</small>
一	於	一	手 <small>カ</small>	非 <small>ヒ</small>
哉 <small>カカ</small>	通 <small>ウ</small>	談 <small>タン</small>	一	情 <small>セイウ</small>
干	一	而 <small>メ</small>	廷 <small>テイ</small>	齒 <small>シ</small>
時 <small>トキニ</small>	客 <small>カク</small>	授 <small>ジュ</small>	為 <small>ナレテ</small>	一
正	一	其 <small>キ</small>	女 <small>メ</small>	木 <small>キ</small>
一	奇 <small>キ</small>	一	一	有 <small>ユ</small>
月	哉 <small>カナ</small>	悟 <small>ゴ</small>	歸	

舌 <small>ゼツ</small>	東	掌 <small>バン</small>	初 <small>ハツ</small>
樓 <small>ロウ</small>	京	雛 <small>スウ</small>	一
一	傳	妓 <small>ギ</small>	紋 <small>モン</small>
上 <small>シヨウ</small>	書 <small>ショ</small>	呵 <small>カ</small>	日 <small>ヒ</small>
	於	上 <small>上</small>	使 <small>シテ</small>
	二	毫 <small>マウ</small>	一
	雞 <small>ケイ</small>	山	三 <small>サ</small>
			一
			弦 <small>セン</small>

汐下れつぎ

二十六の頁を並置
あしきまて
箱の二再彩之格

野まがえ

教匠の穴をさく
長壽の傳を共う
す

繪本虫あらし

虫集二冊花
巻の再彩之格

傾城けい

高時君のきき遊
の澤二自筆を
あらる

うづら

人情抄のあき事を
あつめといふの便り
とす

吉原楊枝

けいせいの買の二件
極細傳をあらる

四方花あらし

四方赤良先生のあらし
久集といふのねがの詞
まのまといふとある事

夢枕糠袋

女郎のあらし
きき目まよあらし
す

狂歌世六斎仙

狂斎人の
俵屋と画く

昨夜の吉

かゝ宅のあらし
山東京傳著

